



切のないお話

やまとの翁

さらもある國の殿様に、大層お話の
 好きな方がありました。毎日々々、
 朝から晩まで、お話を聞くのを
 楽しみにして、他の事は何一つなさ
 いません。一つのお話ですんでしま
 ふと、も一つ、も一つといふ風ですか

ら、御殿中の役人達も皆、知ってる丈の話をし盡して仕舞って、今では誰も話手がなくなっでしまひました。

そこで、殿様は「誰か、切りのない話をして聞かせる者があつたら、其者に一人のお姫様をくれて、この國の後繼にしよう、けれども、若し、切がないといつて出ながら、若し途中でお終になるといふ事だつたら、其者の首を斬るといふお布告を出しました。

さあ、このお布告が出るといふと、吾もくと澤山な話人がやつて参りました。そして恐ろしい長い話をしました。夫でも一週間か一月か續けて話をすると、もうお終になる、可愛相に、お終になるといふと、褒美が貰へない許りでなく、反對に首を斬られるのですから、出来る丈け長く話をひっぱって見たけれども、どうせ皆駄

目で早いか遅いか皆お終になつて仕舞つて、一人も残らず皆首を斬られてしまひました。

何か一番お仕舞に一人の話人がやつて参りまして、何日までも續く話を申し上げたいといひます。で役人共は、この男を見て

「今迄、随分澤山な話人がやつてきて、いろんな話を殿様に申し上げたが、誰も彼も皆首を斬られた。お前もそんな目に遭ふよりは、いっそ已めた方がよからう」。

と言つて見ましたが、この男は少しも恐れませんが、是非話させて下さいと言ひはりますから、夫ではといふので、殿様の御前へ案内せられました。

殿様は、この男を見て、

「あゝお前かい、お終のない話の出来るといふのは、どんな話だ、さあ早く聞かせてくれ」と仰せられる、すると、その男は

夫では御免被りまして、只今から始めます。さても、むかしくまづある國に、一人の慾の深い殿様がございまして、どうかして世界一等の富者になりたいと思つて、方々の國へ攻めて行つては、他の國の米を掠奪つて参りました。そして自分の國には山ほども大きな倉を立て、その米を皆其處へ入れることにしましたから、終には米がその大きな倉へ一杯になりました。そこで殿様は、倉の入口も窓も皆堅く封をして、四方八方きっちりしめてしまひました。

さて、夫程嚴重にこの倉に隙間のない様にしたのは宜しかったが、

こゝに困つたことがありました。夫は左官屋が壁を塗る時、ごく小さな空のあつたのを塞ぐことを忘れて居たのです。しますと、或日のこと、澤山な蟻が這ひ上がってきて、この穴から其米を引き出さうとしました。けれども穴がいかに小さい爲に、一匹づゝしか這入ませぬ。夫で先づ一匹の蟻が中に這入って行って、一粒のお米を引き出して參りますと、其次に又一匹這入って行って、も一粒引き出して来る、其次に又一匹這入って行って、も一粒引きだして来る、其次に又一匹這入って行って、も一粒引きだして来る、も一粒引きだして来る、其次に又一匹這入って行って、も一粒引きだして来る、其次に又一匹這入って行って、も一粒引きだして来る、其次に又一匹這入って行って、も一粒引きだして来る、其次に又一匹這入って行って、も一粒引きだして来る、其次に又一匹這入って行って、も一粒引きだして来る、其次に又一匹這入って行って、も一粒引きだして来る――

彼の男はこんな風に、朝から晩まで、たゞ食事の時間丈け休む許りで、大方一月の間話しつゞけました。殿様もお話にかけては、餘程辛棒強い方でしたけれども、一月のお仕舞頃には、もう厭になつたと見えて、

「あゝよし、その蟻の話はもう夫で澤山だ多分蟻は、そうして米を残らず取り出して行ったのだらうと思ふが、さて其後はどうしたのか、夫が聞きたいものだ、と仰せられると、話人は

御前様には、この後をお聞きになりたいと仰つても、前が濟まない中に、後をおきかせ申すことは出来ませぬ」といって、又話をつゞけました。



木下



七

夫から又一匹の蟻が這入って行って、又一粒を引き出して来る、
夫から又一匹の蟻が這入って行って、又一粒を引き出して来る、
夫から又一匹の蟻が這入って行って、又一粒を引き出して来る、
今度はこんな風に半歳の間、話しつづけました。其間殿様も、じ
っと辛棒して聞いていらした。お言葉をお入れになつ
た

「あゝ蟻のことはもう聞き厭いたわい、一體何日になったら、其米
を引いてしまへるのか」

「何日と申しまして御前、今やと一合位のお米を引いた所なん
ですから、夫に穴の周圍は、一面に蟻で眞黒になつてゐるんですも
の、然し、も少し御辛棒なすつてお聞き下さいまし、何れ其中

には私のお話もお終になりませうから」
これに勵まされて、王様は、又我慢しても一年じつと聞いて居りますと、話人は前の話を其儘續けて行きます。

「さて夫れから又一匹の蟻が這って行つて、又一粒のお米を引き出して来る、夫れから又一匹の蟻が這入つて行つて、又一粒のお米を引き出して来る、夫れから又一匹の蟻が這入つて行つて、又一粒のお米を引き出して来る、夫れから又一匹の蟻が………
といつて又半歳話しつゞけました、幾ら辛棒のよい殿様でも、とうく堪え切れなくなつて、

「あゝもうよい、夫で澤山だ、姫もやる後繼にもしてやる、欲しいものは何でも持て行け其代り蟻の話丈はよしてくれ。

そこで、とう／＼この話人はお姫様を頂くことになつて。殿様の後繼にまでなりました。夫からは誰も、このお話の後を聞かしてくれといふものがありませんでした。と申しますのは、其話人の言ふには蟻が残らずお米を持ち出して仕舞てからでなければ、後のお話をする譯に行かぬ、といつて居るからです。さて、この時からして。この殿様は、決してお話を聞かせてくれくといはない様になりましたとさ

めでたしく／＼

